

## 折々のことば

研究・連携支援センター長 高瀬 尚文

「折々のことば」は、哲学者である鷺田清一氏が朝日新聞朝刊に連載中のコラムの名である。鷺田氏は、吹き荒れる情報の嵐の中でかき消されがちな「つぶやき」を聞き取り、自らの想いや気づきを添えて紹介する。1,337個目のつぶやきは、カセット専門店主である角田太郎氏の「趣味に便利さを求める人は、いませんよね」であった。そんな角田氏のお孫さんのつぶやきに、「ある目標に達するための手段として何かをするのではなく、それをする事自体が面白いのが趣味」と巡らせ、「プロセスを楽しむのだから急げば興も殺される」と添え、「仕事もそんなふうになればいいのに」と結んでいる（2019年1月6日）。鷺田氏が拾い上げるつぶやきは、ジャンルも媒体も問わない。「ヒットして最大公約数のファンを得ることは、本当に好きな人を減らすんだな」は、シンガーソングライターの大江千里氏（2018年2月21日）。「わかりやすさというのは、親切なように見えて、実は非常に不親切なことなのかもしれません」は、茶人の千宗屋氏（2017年5月29日）。「二次的なものを見ずして、一次的なものを見よ」は、物理学者の湯川秀樹氏（2017年5月31日）。「おかわりい！」は、ミュージカルの観劇直後に叫んだ鷺田氏のお孫さんである（2015年10月12日）。鷺田氏は、「折々のことば」で取り上げる言葉は「旧友や恩師と同じで、出会った頃と、50年付き合いしてきた後とでは、魅力を感じる所や関係の意味が全然変わってくる（朝日新聞、2016年8月26日）。」と述べている。今回紹介した「折々のことば」が、地域教育機関との連携事業を通じてどのような深化を遂げるのか。できる限り長く付き合っていきたい。

研究・連携支援センターは、「地域と共に生きる大学」を担う組織として2012年に発足し、研究支援業務と地域社会に対するリエゾン業務を担当しています。他に、今回で第20号となる総合研究所報の発行や公開・市民講座の運営の支援も、本学の知の発信を担う本センター業務であります。リエゾン業務に目を向けますと、4学部10学科の総合大学化とダブルキャンパス化に伴い、自治体や教育機関、企業等との連携事業や共同・受託・委託研究の実施数が増大しており、地域社会の本学への期待の高まりが感じられます。例えば、「高大連携プログラム」は、開始初年度の2010年度は2校でしたが、現

在、京都府立亀岡高等学校及び、京都府立南丹高等学校、京都府立園部高等学校、京都府立須知高等学校、京都府立綾部高等学校、京都府立海洋高等学校、京都府立洛水高校、京都学園高校との間で、各校の授業・行事計画に沿った継続的な連携事業になっています。さらに2018年度には京都府立田辺高等学校と「高大接続プログラム」が始まり、2019年度には京都市立京都工学院高等学校と日本電産株式会社との3者による「高大産接続プログラム」が開始します。シームレスな学びの実践が主題となる「接続」という新しいかたちの連携事業では、本学と地域社会という学内外の「協働」に加えて、学内部局間の「協働」が不可欠な要素となります。こうした地域社会のニーズの変化に本学が応えていく上で、教職員のみなさまには、益々のご理解・ご協力をお願いすることになります。この場を借りて改めてお願い申し上げます。

一方、研究支援業務に目を向けると、京都先端科学大学への進化に加え、分野横断的に連携し、学術研究の社会実装を行う総合研究所や、ナガモリアクチュエーター研究所の本格的な始動に伴い、研究・連携支援センターの役割も大きくなります。こうした学内外のニーズも念頭に、研究・連携支援センター一同、みなさまの研究支援にも尽力して参ります。今後とも宜しくお願い申し上げます。